

令和7年度磐梯山慧日寺資料館 歴史講座 (2025/11/08)

徳一研究の歩み～現代に蘇る徳一菩薩、その足跡を探る

師 茂樹 (早稲田大学)

徳一研究を担ってきた人々

- 専門の研究者 (仏教学者・歴史学者)
- 行政
- 地域の寺院、団体、研究者など

実用的な過去／歴史学的な過去

- 実用的な過去 (practical past) : 個人・集団双方に関わる問題解決や、生存戦略・戦術の過去
- 歴史学的な過去 (historical past) : 科学的に、没利害的に、それ自体が目的として、それ自体のために研究されうるような過去
 - 「国民国家の関心に役立つためであり、またナショナル・アイデンティティの創出の作業の手助けをするため」

パブリック・ヒストリー

- アカデミックな歴史学の外で、歴史を実践すること
 - 博物館、図書館などでの展覧会、展示
 - 学校教育
 - テレビ番組 (時代劇)、映画、アニメ、マンガ、ゲームなど

徳一研究を担ってきた人々① : 専門の研究者 (仏教学者・歴史学者)

研究史① 戦前

- 『傳教大師全集』 (全5巻, 別巻) 天台宗宗典刊行会、1912年
- 常盤大定『佛性の研究』丙午出版社、1930年
- 島地大等「徳一の教学に就て」『教理と史論』、明治書院、1931年
- 塩入亮忠「徳一法師雑考」『新山家学報』1(4)、1931年

最澄『法華輔照』「決択仏性護咽喉」と常盤大定『佛性の研究』

- 初めに天竺の仏性の諍を明かす
 - 『瑜伽師地論』『仏性論』『究竟一乗宝性論』 → 悉有仏性
- 次に大唐の仏性の諍を示す
 - 古説 : 竺道生、『涅槃経』翻訳 → 悉有仏性
 - 新説 : 靈潤 vs. 神泰、神泰 vs. 義栄 → 悉有仏性
- 後に日本の仏性の諍を弁ずる

- 記述なし（最澄・徳一論争？）
- 常盤大定『佛性の研究』
 - 上篇 印度に於ける仏性問題
 - ◆ 『大般涅槃經』『大般若經』『華嚴經』『勝鬘經』
 - ◆ 『楞伽經』の一闡提
 - ◆ 『瑜伽師地論』『顯揚聖教論』『大乘莊嚴經論』
 - ◆ 『仏性論』
 - ◆ 『成唯識論』『仏地經論』
 - 中篇 支那に於ける仏性問題
 - ◆ 竺道生、六朝の仏性説、浄影寺慧遠、天台大師智顛、嘉祥寺吉藏
 - ◆ 靈潤、神泰、義栄
 - ◆ 基、法宝、慧沼、法蔵
 - 下篇 日本に於ける仏性問題
 - ◆ 徳一、最澄
 - ◆ 三論宗玄叡、『一乗仏性究竟抄』、源信『一乗要決』、親円、基弁

『法華輔照』	『佛性の研究』
「天竺仏性諍」	上篇「印度に於ける仏性問題」 『涅槃經』 『大般若經』『華嚴經』『勝鬘經』 『楞伽經』
『瑜伽師地論』	『瑜伽師地論』 『顯揚聖教論』『大乘莊嚴經論』
『仏性論』	『仏性論』
『究竟一乗宝性論』	――
	『成唯識論』 『仏地經論』
「大唐仏性諍」 竺道生・智勝	中篇「支那に於ける仏性問題」 竺道生 六朝の仏性説 浄影寺慧遠 智顛 吉藏
靈潤 神泰 義栄	靈潤 神泰 義栄 基 法宝 慧沼 法蔵
「日本仏性諍」 (なし)	下篇「日本に於ける仏性問題」 徳一 最澄 玄叡 元興寺宗(円宗) 源信 親円 基弁

多様な背景があつた派

二項対立による叙述派

最澄『法華輔照』
↑ 支持
常盤大定『佛性の研究』

批判

本書

研究史② 戦後（20世紀）

- 安藤俊雄, 藺田香融『最澄』（日本思想大系）岩波書店、1974年
- 田村晃祐（1931-2022）の研究（1970年代～）
 - 『徳一論叢』（国書刊行会、1986）
 - 『最澄教学の研究』（春秋社、1992）
- 『仏教文化』第16巻・通巻19号「学術特集号(2) 会津・勝常寺」東京大学仏教青年会、1985年
- 高橋富雄（1921～2013）
 - 『徳一と最澄: もう一つの正統仏教』（中公新書、1990）
 - 徳一関連本多数
- 浅田正博（1945～）

研究史④ 戦後（21世紀）

- 佐藤もな, 道津綾乃, 永山由里絵「湛睿稿本断簡より発見した徳一『中辺義鏡残』逸文について」（『金沢文庫研究』（333）、2014年）
- 楠淳澄, 船田淳一編『蔵俊撰『仏性論文集』の研究』法蔵館、2019年
 - 『教授末学章』
- 大竹晋『現代語訳最澄全集』国書刊行会、2021年
- 木内堯大『最澄「守護国界章」：全訳註』宗教工芸社、2021年
- 師茂樹『最澄と徳一：仏教史上最大の対決』岩波新書、2021年
- 英亮「最澄教学の思想史的研究」博士論文（大谷大学、2022年）
- 武本宗一郎「最澄・徳一論争の研究：最澄教学の淵源とその展開」博士論文（早稲田大学、2025）

徳一研究を担ってきた人々②：行政

勝常寺・薬師如来像

- 『東日本の平安文化史展：会津勝常寺ほか十三寺社出陳』朝日新聞東京本社、1961年
- 『会津文化史展：未公開の名宝』会津若松市教育委員会、1961年
- 湯川村教育委員会編『勝常寺と村の文化財』湯川村、1985年
- 湯川村教育委員会編『湯川村史』湯川村、1985～1994年
- 平成8年（1996年）国宝指定

慧日寺跡

- 昭和45年（1970）、国史跡に指定
- 『伝徳一廟保存修理工事報告書』磐梯町教育委員会、1983年
- 『慧日寺関連遺跡緊急調査』磐梯町教育委員会、1985年

- 『史跡慧日寺跡』 磐梯町教育委員会、1986年～
- 磐梯町教育委員会編『磐梯町史』 磐梯町、1985年
- 昭和62年(1987)、磐梯山慧日寺資料館が開館
- 「史跡慧日寺跡環境整備基本計画」 磐梯町教育委員会、1992年
- 「慧日寺を掘る：史跡慧日寺跡発掘調査展」 磐梯山慧日寺資料館、1993年
- 「磐梯町生涯学習事業 慧日寺を考える：ある山岳寺院の過去と未来」 磐梯山慧日寺資料館、1997年
- 磐梯町編『徳一菩薩と慧日寺』 磐梯町、2005年
- 磐梯町編『徳一菩薩と慧日寺II』 磐梯町、2009年

徳一研究を担ってきた人々③：地域の寺院、団体、研究者など

- 坂本六良『徳一と恵日寺』 磐梯町教育委員会、1973年
 - 「私がこの本を書くことになったのは、磐梯町（桑原啓町長）の依頼によるものだが、同時には徳一の思想にひかれたからである。……私は哲学的には史的唯物論の影響を受けたものだが、階級社会を問題としたようにもとれる徳一の学説にはなんとも惹かれるものである。……それともう一つ、私が徳一に拍手をおくるのは、南都仏教を代表するほどの学僧で、またその地位にあって、富貴権門をなにするものぞといわんばかりに中央学界をおん出たことである。これは私の痛快とする人間像、微小ながらこの流儀で生きてきた私の、ひそかに共鳴するものである。
- 菊地勇『よみがえる史上最高の名僧 徳一菩薩』 いわきふるさとづくり市民会議、1982年
- 菊地勇『幻の名僧 徳一菩薩と私 炭鉦から華麗な転身 常磐ハワイ創業秘話』 2002年
 - 常磐炭鉦の労働組合 → 常磐ハワイアンセンター → 徳一菩薩顕彰運動
- 笠井尚『勝常寺と徳一：みちのくに大き仏あり』 歴史春秋社、1997年
- 笠井尚『仏都会津を今の世に 磐梯町の挑戦 徳一ゆかりの慧日寺と仏像復元』 ラビュータ、2019年
- 白岩孝『徳一を尋ねて』 NPO 法人会津の文化づくり、2007年
- 白岩孝『徳一と法相唯識』 長崎出版、2011年
- 白岩孝『徳一と勝常寺』 歴史春秋社、2016年
- 徳一菩薩に学ぶ会
- ほとがく（徳一ほとけの学校）